

豊明希望チャペル礼拝

2022/5/15

ヨハネの福音書 10：31～42

「多くの人々がイエスを信じた」

今日は、まず、この聖句に注目しましょう。今日の最後の聖句です。

「10:42 そして、その地で多くの人々がイエスを信じた。」

今日は、なぜ、こういう結論になったか、すなわち、今まで、「多くの人々がイエスを信じた」という言葉はあまりなかったのに、何か急に、そういう事になったのは何故かと言うことをみる箇所なのです。

例によって、このヨハネの福音書の著者ヨハネの思いが込められているわけで、ここには、これを読む者への招きがあるということです。すなわち、あなたも信じなさいと。

早速ですが、今日の箇所は、このような報告から始まります。

「10:31 ユダヤ人たちは、イエスを石打ちにしようとして、再び石を取り上げた。」

すなわち、人々はイエス様を拒否し、ついに、イエス様を殺そうと立ち上がったという冒頭のところから、わずか、10 節ほど後には、「多くの人々がイエスを信じた。」という結論になったという報告なのです。

どうしてこんなに変わってしまったのか、いったい、この 10 節の報告には何が書いてあるかと言うことです。

結論的なことを言います。

ここに書いてあるのは、イエス様を拒否し、イエス様を殺そうとさえ考えた人たちに、イエス様の言っている事はともかく、置いておいて(イエス様は、ご自身が神だと言っておられますから・・・それは受け入れられないとしても)、イエス様の行動、やったことを見て判断しなさいと、イエス様ご自身が言われたと言うことです。その結果、いわば、自分の人生からイエス様を抹殺してしまおうとしていた人たちが、イエス様を、わが人生の師、救い主として信じたという事です。

イエス様が処女マリヤから生まれた。神であって、私たちに永遠の命を与える事の出来る、すなわち生殺与奪の権威をもつ神だなどと信じるのはハードルが高いとしても、イエス様のやったことを見て、判断したと言うことなのです。

こんなに心変わりした彼らは、どう考えたのでしょうか。こういうことです。

イエス様は視覚や聴覚に障害のある人、体が麻痺している人、寝たきりになってしまった人、生命にかかわる高熱を出している人など、あらゆる病人や障害者を癒しました。また、荒れ狂う海を沈めたり、水の上を歩いたりして、自分が自然の法則に縛られないことも証明しました。悪霊を祓い、悪魔に憑かれた人を解放しました。水をワインに変えたり、わずかばかりの魚とパンから数千人分の食事を用意し、死人をよみがえらせ、水の上を歩き、死からよみがえらせた・・・

ひとつひとつ神の恵みを数える信仰者のように、イエス様のなされたことを心で整理してみたのです。そうしたとき、色々言いたいことはあるが、彼らは、こう思ったのです。もう議論はやめようと。

そもそもが、この一連の出来事の最初のきっかけとなった、9章の盲人の癒やしでした。そのことを通して、障がい者がかえって神の栄光を現しうるすぐれた存在であることを教えられました。それは、彼らの考え方、人生の価値観さえ変えなければならない出来事でした。そして、その出来事は、2000年経っても新しさを失わない価値を持ちます。彼を探しに行くイエス様の、その愛の気高さは、いまだに、人間が到達していない高さを示すものでした。その出来事は、いわば、百万言(ひゃくまんげん)の言葉よりも、雄弁に語ったのです。この方が神である、救い主であると。

最初から見ていきましょう。一気に見ます。

「10:31 ユダヤ人たちは、イエスを石打ちにしようとして、再び石を取り上げた。10:32 イエスは彼らに答えられた。「わたしは、父から出た多くの良いわざを、あなたがたに示しました。そのうちのどのわざのために、わたしを石打ちにしようとするのですか。」10:33 ユダヤ人たちはイエスに答えた。「あなたを石打ちにするのは良いわざのためではなく、冒とくのためだ。あなたは人間でありながら、自分を神としているからだ。」10:34 イエスは彼らに答えられた。「あなたがたの律法に、『わたしは言った。「おまえたちは神々だ」』と書かれていないでしょうか。10:35 神のことばを受けた人々を神々と呼んだのなら、聖書が廃棄されることはあり得ないのだから、10:36 『わたしは神の子である』とわたしが言ったからといって、どうしてあなたがたは、父が聖なる者とし、世に遣わした者について、『神を冒とくしている』と言うのですか。10:37 もしわたしが、わたしの父のみわざを行っていないのなら、わたしを信じてはなりません。10:38 しかし、行っているのなら、たとえわたしが信じられなくても、わたしのわざを信じなさい。それは、父がわたしにおられ、わたしも父にいることを、あなたがたが知り、また深く理解するようになるためです。」「

前回の30節をみます。

「私と父とは一つです。」父、すなわち、神とイエス様が一つ。ユダヤ人が引き出して、キリスト御自らが神であることを明確に言われた言葉となりました。また、その前に聞いた(：24)「あなたは誰ですか・・・キリストならはっきりと言って下さい」聞いたことへの明確な答えとなりました。

要するに、神です。父なる神と一つである者だ。すなわち神だと言われたのです。

ですから、その彼らの反応は、きわめて想像できる反応です。

「10:31 ユダヤ人たちは、イエスを石打ちにしようとして、再び石を取り上げた。」石を投げて殺そうとしたのです。

イエス様は、そんな彼らに、こう言われました。

32節以下です。

それは、人の言葉尻を捉えるのはやめて、私の行い、私をもっと良く見て下さい、石打に値することを私はしてきましたか？と、ある意味では、彼らに冷静さを促すものでした。

そしたら、33 節では、彼らは、行いではなく、言っている事がメチャクチャなんだと応えたのです。

これは、イエス様の導き、狙いであったのではないのでしょうか。というのは、彼らは、こういう事で、イエス様が良いということ、行いにおいては良いということを確認しているからです。

それは、イエス様が、彼らの口でそれを言わせて、彼らを導くためでした。

すなわち、「よいわざのためではなく」という告白です。裏を返せば、良いわざは認めると言っているのです。

イエス様は、彼らを導いておられます。彼らを正しい告白に導いて、その正しい告白をヒントに、みずから気づかせようとしておられるのです。

「(イエス様は)よいわざはしている・・・」そう気づかせようとされたのです。

33 から 36 節にイエス様が言われている事は、彼らの先入観を取り除くことでした。彼らが邪魔になっていた考えは、「人間は神ではない、神ではありえない」ということでした。時に、人は、それがたとえ正しい考えであったとしても、その言葉に混乱させられることがあります。

私は歴史上の為政者が、そして、今も、実に立派な論理で、間違った方向に、むしろ身を滅ぼす方向に自らもそして、国家も導いていくのを見るのです。

アジアを西欧列強から開放しよう、大東亜共栄圏を築こう。その考え事態には、何か夢があり、正しさを秘めているのです。しかし、そのスローガンが一人歩きし、それにとらわれ、そのためなら、アジアを一度は滅ぼしてしまおう、そのためには手段を選ばず殺してしまおうと突き進んでいったのを私たちは歴史の中で見てきたのです。今も、ナチズムから解放するために、ヨーロッパの圧力から解放するためにと、一見、解放者、自由を与える者であるかのように信じながら(まさに信じているのかも知れない・・・)、間違った方向に導くのをです。

「人間は神ではない」その言い方は正しい。人は神のように振る舞ってはならない、それは、ある意味正しい言い方です。しかし、その言葉にとらわれすぎて、今、目の前に起きている救いと、目の前にたっている救い主を見逃しているということが起きうるということです。だから、イエス様は、あえて、ダビデも神と言われたし、詩篇の作者は、我々人間を神々の一人であるかのように尊い存在として扱って下さったことがあった。あまり、そうした言葉の魔術に、あるいはイデオロギーにとらわれて、真実、事実を見失ってしまうことがあるよと導かれたのです。

「10:34 イエスは彼らに答えられた。「あなたがたの律法に、『わたしは言った。「おまえたちは神々だ」』と書かれていないのでしょうか。」(詩篇 82)

とはそういう意味です。

さて、この 38 節までで大事な事を言います。

それは、イエス様は、「石で殺そう」とさえ考える、最後の一線を越えてしま

ったような罪人をもあきらめないで、なんとか導こうとしているということです。ちょっとでも正しい事を言っていればその言葉を指摘して、それは正しいよ、その線で考えてごらんと。また、私なら、「わからんやつにはわからん」と拒否してしまいそうなところを、まるで、横暴な為政者をなだめるが如くに、忍耐をもって、導こうとされているということです。

結論を急ぎますが、だからこそ、最初のところで言いましたように、多くの人々が導かれるというところにつながったということです。どういう事でしょうか。ヨハネは、神とは、イエス様とは、このように、こんなうなじのこわい、頭の固い罪人をも、このように導くことがお出来になるのだと言うことを、最後に、言ったと言うことなのです。

イエス様は忍耐深い、そして、うまく人を導くことが出来る。必ず。

最後に、こんな話しをしたいと思います。それは、ウィクリフ宣教団の働きについてです。

彼らは、いわゆる未開の民族のところにでかけて、識字教育からはじめて、現地の言葉で聖書をつくり、その後に続く宣教師に教会形成をゆだねる、そういうゼロから宣教の道をつけるという貴い働きです。

パプア・ニューギニアで、教育宣教師をされていた、福永先生という方について聞いた事があるでしょうか。パプア・ニューギニアは、オーストラリアの近くにあり、そこには、様々な言葉を話す人々がいます。800の文法も語彙も違う言葉を話す人々。書かれた文字を持たない。そういう人々に福音を伝えるためには、まず原語を研究し、辞書を作り、それから聖書を、その部族の言葉に翻訳する。これが海、これが森、一つ一つ何回も言葉を発してもらいながら、次第に、神、罪、救いと言葉を選び、ない言葉はあらたに作って行く。だいたい、20年から25年たつてようやく、新約聖書が完成する。しかし、仕事はそこで終わるわけではない。その聖書が読めなければならない。そこで、識字教育が始まる。学校を作り、言葉を教える。一つの聖書を作りるために、それぞれの宣教師は、ほぼ人生のすべてをかけるのです。800あるという部族のそれぞれの人数は、数百人、数千人という人々。彼らは、そういう小さい村の人々の救いのために、一生をかけるのです。

福永宣教師は、北海道大学の教育学部を出て、その賜物があるからウィクリフの教育宣教師として召されました。彼の両親は静岡で葬儀屋さんを営み、彼がその跡取りでした。私自身も彼と共に、その思いを共有しました。そこには、イエス様の宣教命令の使命を果たさんとする思い、人を愛する心、彼らを理解し、彼らと家族になる覚悟、一生を彼らと寄り添って、彼らを導こうとする思いを見たのです。

それは、イエス様の忍耐、その愛、罪人をあきらめない愛から来たのだと思います。

今週の歩み。人間的な考えで、考えすぎて行き詰まってしまう人間のままでいい、難しい理論はにおいて、イエス様の恵み、イエス様の業にこそ目をとめ、すなわち十字架とその恵み。復活。この驚くべき恵みを、十分黙想し、キリストこそ神、このお方に従う告白をして歩み出したいと願うのです。